東洋史研究 第二卷 第五號 昭和十二年六月發行

大金得勝陀頌碑の研究（上）

田村實造

一、解　題
二、女眞文（碑陰）譯讀
三、漢　文（碑面）解說

一

大金得勝陀頌碑が昭和八年の夏、須佐嘉橘氏苦心の探査に依つて、滿洲國吉林省扶餘縣石碑崴子の原地に再發見されて以來、我が國及び滿洲國學界に於て齊しく注目される所となり、在滿の園田一龜氏は逸早く同年十二月「大金得勝陀頌碑に就いて」と題して詳細なる紹介を爲し（奉天滿鐵圖書館叢刊第十二册）石田幹之助學士亦この碑に就いて簡述される所があつた。(1)

然し、その最も學術的價値を有し、且つそれの故に學界の尊重注視する碑陰の女眞文字に關しては、未だ何人も之が解讀を公にしたのを聞かない。今回、余の試みたる譯解は不完全極まるものにして――原碑石の損滅剝落

によつて拓本に明瞭を缺く部分多く、且つ既知の女眞語彙甚だ少數なる爲、その解を得たのは纔かに全文の半ばにも滿たないが――固より充分之を認知し、衷心甚だ忸怩たるものがあるも、全てを只管なる今後の研究に期しつゝ、一先づその整理を試みて博雅の斧正を仰がんと欲する次第である。

碑石の所在・形式及び建置の年代　　本碑石は滿洲國吉林省扶餘縣石碑嵗子部落（扶餘縣城の東北約一六〇滿里雙城縣城の西方約一三〇滿里）の東方約三十町の地點に現存し、この地に至る捷徑は普通、京濱線雙城車站（驛）より西々北、八家子に於て拉林河を渡渉し、伊家店を經て直南行するか、(2) 或は同線蔡家溝車站より拉林河の南岸に沿ふ伊家店街道（？）を西北行するかの何れかである。(3) 曹廷杰の東三省輿地圖說、得勝陀碑說の條には

在拉林河西岸。距入松花處四十里。亦名額特勝噶珊。今呼石碑嵗子

と謂ふ。

須佐氏の言に據れば、碑石の全長約八尺（篆額約二尺）幅三尺餘にして、文字は兩面共殆んど磨滅剝落して讀み難く、且つ石は嘗て兩斷したるものゝ如く、今は之をセメントを以て接合し、龜趺上に載せられてはゐるが、篆額は監督者の不注意により、その漢字・女眞字を碑身のそれと表裏相顚倒せしめるの滑稽を演じてゐると。(4) 而して篆額には本來前面に「大金得勝陀頌」の六字が二行に、背面に之に該當する三行十二字の女眞小字が刻出されて居り、碑面の漢字本文は序十六行・頌九行、外に題字・題撰及び最終行の立石年時を合すれば三十行を算し、碑陰の女眞文は碑面漢文と同じく序十七行　頌十一行に題銘・題撰・立石の年時を加へて計三十三行に亘り、內容も亦碑面と大差をみない。惟ふに、漢文先づ成り、而して後之に倣つた――或は殆んど飜譯したものであらう。

次に碑石建置の年代は碑文に據れば、世宗の大定二十五年(一一八五)七月二十八日にして、卽ち同年四月世宗の上京會寧府駐蹕中に起工されたこの碑は、三ケ月の日子を費して漸く竣工を告げたものゝ如く、七月と謂へば恰も世宗は上京を發して燕京への還幸中に當る。(5)

註

(1) 三松盦讀書記(二)(史學雜誌四五編一號)

先是、同氏は「女眞語研究の新資料」(桑原博士還曆記念東洋史論叢所收)に於ても、この碑に就いて觸れてゐられる。

猶、この碑に關して記述された日・支諸學者の文獻に就いては、園田一龜氏前揭論文第三節「碑石と文獻」の條を參照。

(2) 雙城縣志(卷二) 輿地志、津梁の條に、

拉林河渡口有七。……一在城(縣城)西北一百一十里八家子。爲扶餘縣所經。河西有得勝陀碑。爲金太祖阿古達(阿骨打)伐遼渡河誓師處

と謂ふはこの道である。

(3) 須佐嘉橘氏の採つた道は雙城縣より西南韓家店を經て拉林河を渡つたのであるが、これは氏が當時皇軍と行を共にせられた爲にして、最捷徑とは謂へ原地に至る正規な道ではない。從つて一行は河畔に於て渡船を得るに困難した由である。

(4) 女眞文字には周知の如く、大字・小字の二種があり、大字は金の太祖阿骨打が、天輔三年(一一一九)完

顏希尹に命じ、契丹文字の制に倣つて作らせたもので、恐らくこれは契丹文字を襲用したものであらうと思はれるが遺憾乍ら未だ確認をみない。小字は天眷元年(一一三八)熙宗の製に係り、皇統五年(一一四五)以來廣く使用されるに至つた。本碑石に刻出されてゐるのは小字にして、女眞小字の現存資料はこの外に、金石文の類に、

(イ) 泰和題名殘石(一名奥屯良弼餞飲碑とも稱せられ、金の章宗泰和六年(?)の刻石に係る)

(ロ) 女眞進士題名碑(一に宴臺碑とも呼ばれ、金の哀宗正大元年(?)の刻石と覺ぼしく、河南省開封縣內文廟に現存す)

(ハ) 柳河半截山摩崖碑(滿洲國奉天省柳河縣半截山にあり、大金太祖息馬址碑とも稱し右に漢字、左に女眞字を對刻してゐる)

(ニ) 海龍楊樹林山頂摩崖碑(滿洲國奉天省海龍縣)

(ホ) 高麗北青城串山摩崖碑(朝鮮咸鏡南道北青郡俗厚面蒼城里に存し、稻葉岩吉博士によれば、元の後至元四年の刻に係ると謂ふ)

(ヘ) 高麗慶源碑(もと朝鮮咸鏡北道慶源郡東原面禾洞に存したものであるが、今は京城總督府博物館勸政殿に移置さる)

(ト) 永寧寺碑(明の永樂十一年九(?)月の建置にして、もと黑龍江口附近 Tyr(特林)に存したが、數年前この碑を親しく拓出された梅原助教授の言によれば、今は浦鹽斯德市立博物館に保管されてゐると。)

文書の類には華夷譯語中の女眞館(肅愼館)譯語並に來文等があるが、これに就いては、石田幹之助氏の「女眞語研究の新資料」(桑原博士還曆記念東洋史論叢所收)に詳說がある。

猶、女眞語及び女眞文字の研究に關しては、

白鳥　博士　「契丹・女眞・西夏文字考」(史學雜誌九編一一號)

桑原　博士　「山東河南地方遊歷報告書」(歷史地理一六卷三號)

羽田　博士　「契丹文字の新資料」(史林一〇卷一號)

稻葉岩吉博士　「北靑城串山城女眞字摩厓考釋」(靑丘學叢第二號)

石田幹之助氏　「女眞語研究の新資料」(前揭出)

同　　氏　富山房國民百科辭典、女眞語及び女眞文字の項

渡邊薰太郎氏　「女眞館來文通解」(大阪東洋學會刊行亞細亞研究第一一號)

同　　氏　「金史名辭解」(昭和五年、大阪東洋學會發行)

同　　氏　「女眞語の新研究」(亞細亞研究第一二號)

山下　泰藏氏　「新女直國書碑に就いて」(奉天滿鐵圖書館叢刊第一八冊)

石濱純太郎氏　「滿蒙言語の系統」(岩波文庫東洋思潮)

羅　福　成　氏　「宴臺金源國書碑考」(北京大學國學季刊一卷四號)

同　　「女眞國書碑跋尾」(國立北平圖書館月刊三卷四號)

同　　「金泰和題名殘石」(東北叢刊第一七期民國二十年五月)

同　「宴臺金言國書碑釋文」(考古・第五期民國二十五年十二月)

劉師陸氏「女直字碑考」　(同　上)

等があり、歐米に在つても、獨逸 W. Grube 教授の Die Sprache und Schrift dre Jučen (Leipzig, 1896) を始め幾多の研究があるが(石田氏前掲論文參照)然し唯、小字には音を寫した音字と、音とは無關係に漢字の形を少し變へて作つた義字とがあると考へられる以外、その言語の性質なども充分に究明されず、詳細は專ら今後の研究に俟たねばならない。

(5)　世宗は大定二十五年四月二十六日上京會寧府を發し、同年九月二十九日燕京に歸還してゐる。

二

既に一言した如く、この碑の價値は碑陰の女眞文字に依つて高められてゐるものにして、碑面漢文よりしては殆んど新事實と認むべきものを抽き出し得ないが故に、便宜上碑陰女眞文字の譯註より先に試みる事としたい。

左に掲げるものゝ中、右端は碑文に刻出された女眞文字にして、判讀不能のものは△印を以て示し疑はしいものには?符を附することゝした。中央は漢字の音譯にしてこれは主として W. Grube の Die Sprache und Schrift der Jučen にみえる漢字を以て充て、左端に邦譯を施こした。各行上端の〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕等のローマ數字は原碑文の行數を示し、文中の(1)(2)等のアラビア數字は備考に於て說明を加へられてゐるものである。

題識

Ⅰ 夆米斥土(1) 羊(2) 奚專芹彔(3) 羊皂反

安班安春溫 你忍土繼葛蠻 你幹溫

大金ノ得勝陀ノ領

Ⅱ 芙仟（以下不明）

老魯溫

Ⅲ 休△△△△△臣休? 耒(1)△△△休奈屯△吏? △△△△△中奈吏（以下十二字不明）弟球

別 ?充丹

寒里因 同知以 同知ノ

翰林(?)

里

Ⅳ 皂反芒△△△反? 弟羊徒 弟（以下六字不明）吏米充△△△△宏徒? 水?

幹溫師 上勤絹 你 ?武黑塔 扎班 ? ? 武黑 ?

文 文

Ⅴ 奚專芹彔? 尺

忍土繼葛蠻 ?(?)

得勝陀

〔VI〕

太祖武元皇帝ノ軍師ヲ曉諭セシ地ナリ。〔賓錄・睿德神功碑ヲ按ズルニ〕

天永益中岌止呈丞屯益巴(1)史斗(2)左什(3)奎 東余伏去卑爰辛△旁？△事？……

太素 鈔哈？下皇帝 以 鈔師 伯 兀忽黑ト阿 ？勒 脉兒？？塔幹 ？ ？

〔VII〕

太祖軍師〔ヲ率ヰテ〕〔？〕來流河ヲ渡リ衆軍ニ〔命ジテ〕畢ク〔會セシメタリ。〕

天永益巴 叟奎宋(1) 乏？△列侑(2) 岸(3) 麦尤(4) 旁丘(5) 益巴 尿(6) 自戈 肖麦 兵(7) △△△……

太素 鈔師？天非 紐 林必剌 朶 塔別 華恩 鈔師？ ？？ 果ト兀魯

〔VIII〕

太祖〔首メ〕高州ニ出デ在セリ、〔國相？〕撒改 苛 順ヒ 來ル。

天永 岌岌(1) 亞美 岸(2) 美伴 史 畢？房(3) 庫？太？ 犖(4) 恭 可 伏 爰 中 尖(5) 角 右

太素 ？？ 祇革朶 充替別？木魯 斡兀迷兒 撒改 阿的 塔哈埋 的昧

〔IX〕

聖身ハ松ノ如ク〔？〕乘リシ〔靺鞨〕馬ハ〔岡阜ノ如ク〕（以下不明）

令 宋 夺 希 爰 糸 抑 妄(1) 糸 弓 罕？ 足(2) 麦 条(3) 得 列 朱 美 足(4) 卒 列 史 廿 史 竹

阿茶ト魯 背也 和朶？ 你都？ 呬魯梅 孩 哈哈 毋林？申？ 祇因森 吉？伯 稱

〔X〕

太祖并ニ撒改苛ノ人馬ハ〔異常〕ノ〔風ヲ〕爲シ來リタルヲ其ノ……〔ヲ視テ〕

天永 麦 爰(1) 条 可 反 屯 件 得 列 有 屈 糸 斗 条 角 旻 宋 史 兀 东 ……

太素ト魯 撒改 阿的以 揑兒麻 毋林？厄 你？撒 斡非 的者 厄伯 馬阿

〔XI〕

天子布右立丕生勿扎夫卒対咪血犀(1)尿(2)宗夫(3)弟矣夫(4)丕吳糸伐

太素 太祖 謂 ア、コレ 天 ? 絲踏塞咪 厄勒 阿卜哈 納 ? ? ? ? ? 住希 ? 敵 ヲ 敗リ 擄掠スル 天 (験(兆)ナリ) 阿利魯 瑣塞魯 阿卜哈 ? 嘔勒

乙屋△盂史弓生(5)犯△盂咪? 阜? 米? 斧米支文爰盂升米(6)(7)(ヲ間八字不明)

兎 厄 失金 別 忽孫法 失 ? ? ? 安班委勒 目 忒 失黒 吉撒 若シ大事 成リタレバ

百姓(鑄君) 同 心シ 協力スベシ

尤斧尤咪? 陛? 斧? 矢米△△△咪? 少尻△△△△矢米△△△△尤中△△夫

那 ? 別 厄 ? 斡 厄 革卜 上ニ 名 厄 都魯 魯 革卜 名 以哈 ノ 魯

〔XII〕

糸? △旻? 夫? 飛? 作? 盂中尤米阜卄米尤盂丙玉丑巳更列尼史(2)尤夫右(3)写弓足△△△

? 者 厄 多羅 斡 鈔哈 以 朶羅 牙卜 別 失 革 恩 鈔 師 兀 禅 因 厄 尤 別 那卜 連 昧 一 立 本 孩

〔禳禮〕法〔ヲ〕軍ノ中ニ行ヒ二後、衆軍 武 装ヒテ 爭ヒ(競ヒ) 立テリ。

△△荒△北矢△△罘? 甘? 盂尤尤欣? (天?) 糸? △更(以下六字不明)元夫斧米米中足丟米卒(4)夫丙

失里 革登 ? ? 忒 以 以 ? 縛約 麻 別 ? 受 安班 嘔哈 孩 嫩 木杜 兒 塞 革

往 大定 甲辰 歳

XIII

東?△△方朱孟希笑右(1)△冬衣?弟岸未尤

〔車駕〕東ニ巡狩又　上〔京ニ駐蹕〕シ

XIV

益印尚止糸△左(1)吳△矣升禾阡(2)尸(3)阡多尤(4)

武　元ノ〔締構〕難ヲ偲〔追懐〕ビテ

XV

炎哭弓左旱屯胱吳丈(1)乭寸吳屯孟益尸丈屯奕矣史(2)尚?△寸〔年?〕(3)

孝　孫子ノ昭　光ノ道ヲ傾ケ〔盡クシ〕　新ニ

XVI

克拏(1)舟寸糸?刃冬在朱刃冬在朱(2)令丈斧阜屯系△史孟△△阜史

神〔祖〕ノ穆　穆タル聖容〔ヲ嚴ニシ〕碑

△△史△△妻△奈史志茶且斧△（以下不明）

〔ヲ刊セシメテ暉暉タル業〕ヲ治メタリ。

〔XVII〕

丞 哭 穹 斥 爰 △ 厄(1) 尾? 米(2) 夫 狩 宋 牟 米 宗 斗(斗)? 芳 系 (以下十五字不明)

塞 吉 華 卓 ? ? ? 班 卜 勒 厄 厄 安 班 阿 刹 以 藍(元) 興 巴

孝 偲(スルヲ) ヲ 〔忘レ〕 ニメザラン為ニ、閥 休(大ん喜) 〔ヲ張リ偉績ヲ揭ゲ〕

厄 史 东 △ 屈? 乏 △ 益 奈 厄 △ △ 采 米 △ 狀(3) 要 色 卡 月

? 別府(帝) 厄 網 瓦魯 ? ? 富 班 阿捏 朱阿 厄林 都四 伊阿

益ニ加フル有リテ已ム無シ〕 〔明〕年 夏 季 四 月

〔XVIII〕

英 雪 阡 苏 厄 阡 爰 冬? 牟? 旻 采? 盂 床? 且 冬? 閑 土 羊 甩 炎(1) △ △ 炎(2) △ △ 閑 土 羊 甩 炎

笠 縫 葛 蠻 ? 卓 ? 斡 安 者 妾 失 ? 殘 斡 國 倫 你 背 塞 塞 國 倫 你 背 塞

得 勝 陀 ヲ 偲ビ〔テ如何ニスベキヤト〕 相 臣(國 斉) 〔ニ商リタルニ〕 相 臣 ハ

△ 荒 作 屯 甩 炎 △ △ △ △ 荒 作 屯 甩 炎 帝 阡? 羊(3) △ 〔東〕 灰(4) 丕 弋? △ 表 羊? 犯 脊 夏(5)

多羅斡以背塞 多羅斡以背塞 塔 安 你 素 溫 太 延 ? ? 華 捏 別

礼 官 〔三訂セリ〕 禮 官 ハ、唐 ノ 玄 宗 太 原 ニ 幸 シテ

△ △ △ △ 且(6) 帝 阡(7) 羊 阜 灰 史 东 阜 △ 南 (以下大字不明) 东 宋 糸

殘 塔 安 你 斡 溫 別 帝 斡 蒼 帝 厄 宮

〔郊 義〕堂 ノ 頌 アリ. 上〔黨ヲ過ギテ〕 舊 宮

XIX

令史斥伏△辛冈史东辛△支南右南辛冈△△△△全（以下不明）

聖　阿赤卜魯？瞰兒　斡温　別弗　戍　妄勒　哈察哈　斡温　哈兒

頌碑アリ。今ヲ事ヲ見テ頌碑ヲ刻シ字ヲ建テ以テ

XX

令史使？文？充？夷更夫五伴兄？？閑土羊凡火史△分友朱(1)△东△史来？？

聖　阿赤卜魯？和ノ宛哈赤？失替孩？　国倫你背塞　別　呂剌吉撒　阿　別？？

〔跡ヲ勒スハ義トシテ允ナラント爲セリ。〕相　臣　然（斯ク）奏セバ……

XXI

系　冗？(1)但左伴戻(2)弔犬使屯五丑岸五丑乐(3)史更列东(4)五有丙史更底(5)

勅、臣人可（名）當三文字ノ道　三（ヲ以テ）罪ヲ翰林ニ

阿利瓦？　卜斡尼捏兒麻可？　若　戍里以　住兀朶　思戍里伯　丑林？　思？？　別　赤巴勒

〔然レバ則チ〕

文亥五升志茶米(6)△弔史南父△△△友△但（左屯岸吳乐）火史(7)苋臣△

成　功　ヲ（頌美スルハ）臣ノ官職ナリト、（敢テ）

昊戍失黑扎撒富　塔伯若魯　剌　卜斡尼以尼者黑　塞魯　罕塞

系（庆）伏？△△△△更史伏史克父？丑？(8)布△△

巴撒？　別伊戍里伯　戍魯戍　赫路塞

再ビ　文ヲ進メテ謂フ。

XXII

屏犬(1)杀尼史盂盂庠冬史
希彈 你厄林厄 住 兀上魯斡別
契丹ノ李ニ道 失ハレテ

芒?导史丞 伊房
师厄黑 伯阿卜哈 端的木魯
〔?〕悪ヲ天南ケリ。

盂申淌土斧妄斧房
鈔哈 ? 下 ? ? 半的木魯
武 元 〔?〕生レタリ。

斧米〔女杀元孔〕
安班 密 你 馬法
皇矣、我ガ祖

束史盂美史冬盂右(2)屯茶犬△
瑞勃厄 脫兒革 伯斡失昧 充魯哈剌
東 方 ヲ塑リ 視タルニ

丞史史斗芳系(3)羔〔字?〕
阿卜哈以 阿剌兀 興 巴 ? 蒙
天ノ祐 〔ヲ蒙リ〕

XXIII

屯桑? 盂南尤冬邦△考犬?
充魯哈 失一 野斡都 ? ?
望ム ニ 是 〔陂 陀〕

布△宛桑全考 岁夷?(2)
錄野塞 北失 哈 孫 哈者 ? ?
言 令 誠信 ニシテ

南 祀犬(4)圳芟赤丞史盂△△
兀者 少 登 开 卜 受 阿卜哈以思戍
敬ミテ 行ヒシ 天ノ罰 ……ハ

△△羊?犬又犬志茶犬臣?圭
朶剌? 塞 扎撒 埋寒 紳
〔爰三〕 治メ

老米(3)阿珞班 阿班 哥塞 塔里 哥塞
雷 ノ如ク、霆ノ如ク

考 岁夷?(6)△△令史盂申
哈者 ? ? 阿赤卜魯 鈔哈
寒ニ 聖 武タリ。

〔以下一紋アリシモノノ如ク認メラルルモ字劃不明〕

吻斧申保米卦禾札犬考奚?(1)
果都哈厄富的? 下阿的? 忽充
〔各稱 爾戈〕

盂申史斧 妄△△△△
鈔哈 以 ? ?
武 ノ……(桓桓之士)

方 立 次 立
勒付 厄勒 塔恩合 厄勒
熊タリコレ、虎タリコレ。

XXIV

尚 尚?(1) 关 伟 △ 考 关 关 茂 旱?
? 充 暨 ? ? 你? 羅
首メ 出デテ 陀(草)ノ ?

(コノ間字劃不明) 元 东
馬 阿
ソノ

△ 元 东 关 弓 罕 且 得 列
馬 阿 哂 鲁 梅 孩 毋 林
ソノ 乘リ ン 馬ハ

XXV

胤 元(1) 文 也 全 盂 吊(2) 吴 仟
罕 安? 尧 鲁 哈 兒 失 左 者 温
皇帝 視タル時、左右

色 △ 怒? △ △ △ △ △
? ? 〔先 是〕

丕 写? △ 克 芊 苑 △(2)
阿卜哈 赏 ? 兒 撒 少
天ヨリ蒙リシ神 祥ヲ

余 太 夸
阿赤 卜 鲁 背 也
聖 身ハ

朱 关 文 辛? 列 羊(4) 米
? 申? 戍 林 安 班
岡阜ノ如ク大キリ。

麦 爻 舟 皮 阜 △ 仟 岸
卜 鲁 番 阿的 斡 捏 兒 麻 朵
并ニ 〔?〕 人 ニ

〔天 禾〕
太 素
太 祖

也 素 且 年 光 舟 皮 阜 △ 旱
尤 鲁 哈 孩 斡 嫩 番 阿的 斡 羅
視 タリ。 〔?〕

洲 爻 关 祎 交(3) 丑 方 忠?
和 朵 你 都? 戍 革 阿 剌
松 ノ 如 ク 高 ク 〔シテ〕

关 东 立(3)? 辛 奚 文 先 角 发(4)
塞 麻 厄 勒 戍 比 ? 年 的 麻
曰(ラク、コノ永キ(恒)ノ ---

XXVI

咪盂屏(5)宋夫〔宜〕莉圭光(6)
? 住希 阿利魯以撒少申?
敵ヲ敗ルノ祥符ナリ。

咪盂〔屏奈〕宋足〔計南宋〕(7)
? 住希 阿利孩奎蒼吉撒
敵ヲ敗リテ旋還ラバ

旱宅角年寺夷为南(1)
羅以?? 拙斡赫都魯
〔?〕

〔安羔〕笠中広△△色列
密你鈔哈充 厄林因
我ガ軍雲ノ如ク

△△△△胧〔旻右〕(5)
? 者 昧
昭カニス。

吞文丑丑类△△
?? 失恩ト
〔諸君之ヲ勉メヨ〕

矢类右? 屏△丑△△
革ト昧希 厄勒
名付ケン此地ニ卜欲ス、コレ

宋的〔面〕△宋菜△旻宋荒△△(2)
非果〔兒〕厄? 者厄罗羅
禳禬ノ法

屏宅足妄? 妄? 条? 昆?
希 無孩
〔?〕

尭丑?(8) 盂丑受申夫尿廿类夫
? 兀里住兀塔哈魯? 牙卜魯
神道〔三〕順行〔嚮應〕スルナリ。

旻牛支东宋尭?
别黑 妄勒 申厄 ?
有リシ事 舊

尭琴宅力牛(4)
? 兒脫妄 都塔 洪
神火存セリ。

尭宅庆房(6) 辛系△廿禾
厄勒以 哥塞 忒比 牙素
斯クノ如ク當ニ〔彰〕ナリ

尭〔西〕弗申? 咪? 采枕反卦(3)
果都哈厄富 下阿的的
〔戈甲相屬〕

丞更力△牛盂丑
阿卜哈别都塔 洪 住兀
天〔三〕存セシ道ハ

〔XXVII〕

國 止 反 虎(1) △△ 耤? 史?
國 倫 卜? ? ?
國 家(房)

余 米 反 虎(1) 岸 戈 △△(3)
王 你 卜 ? 朶 脫委
王ノ 屋(房) = 火〔流ル〕

𢦏〔丞 虎〕右 ? 火 尼 △ 乏
撒少 申 ? 昧 伯 扎 納
祥 符

△ 夷 史 益 中 斧 列 尚 益?(弔)
元魯 伯 鈔 哈 阿弟 國 果 元魯(部)
〔周 武〕〔戎 衣 シテ〕

△ △ 益 米 批 斧 史 咪
帝 你 追 洋的 別 尼
〔赤〕帝ノ子 生レタリ。

𢦏〔丞 虎〕咪 佗 兄 △(2)
撒少 申 ? 尼 勒 撒
祥 符 知

〔匡〕 米 △(4) 史(5) △ △ △
罕 素 伯
漢 祖 〔劍〕ヲ〔奮ヒテ〕

阜 丞 太? 矣 弟 益 △ △ △
斡 者 尼 云 塞 ? ?

立 益 哭 矣 太 禾 反 杙 弔 衣(6)
思 戍 ? 塞 魯 素 溫 ? ? ?
罰 宗

〔XXVII〕

仟 兒 有 史 其 矣 安 邑
? ? 兀卜 伯 蓋 赤 ? 哈

面 赤 弟 足 𢦏 另 △ 盂
? 子 阿 利 孩 撒少卜 弄ノ 食 吏
敗リシ 祥(兆)

兒 文 屯 列 五 吏 岁 东 友
? ? 尼 林 因 ? 斡 ? 阿 剌
ノ 如ク

卒 岸? 朱 面 友
戍 朶 干 都 魯 剌
今ニ 至ル〔モ〕

东 安? △ 益(1) 矣 斥?
弔 ? 撒 剌 火 ?
〔遺〕 老

立 支 乞 卦 友 面
尼 勒 奏 勒 以 笃 干 尼 都 魯
ヲノ 事ノ ‥‥

令 史 作 士 米 丞 乞 斥(2)
阿 赤 卜 魯 安 春 溫 你 阿 卜 哈 以 追
聖 金 ノ 天 子

益 中 尚 止 米 左 旱 立
鈔 哈 ? 下 你 斡 莫 羅 尼 勒
茂 元 ノ 孫 子 コレ

〔XXX〕

北南 …… セリ。

(1)

(2)

〔XXX〕

風ニ〔椰リ〕雨ニ〔沐シ〕 大ニ 泡メタリ。

聖 容 既ニ 新〔ニシテ〕

聖 功〔既ニ高シ〕

舊 國 至リテ

舊 義

〔列〕祖ノ 勅シテ

XXXI

矣杀完孔矢美？史孛
我ガ祖 名付ケタル？ 家你 馬法 革ト 別？

立支史昆矣史(1) 夷史史作
コノ事ヲ〔詔シテ〕 匠勒 婆勒伯？？魯 和捏 苦厄 云吉

岕炎父岸弗炎状史卑炎岸？
〔？〕 賞セシ 塞水社 埋厄 塔塞 覽黑思塞厄

兀孔它文爻丑作△△作(3) 弑介△(4)
祖ノ功業〔王〕〔？〕輝光〕シ 馬法以目戍 失黑 黑 非稱

蚩△余△華△兢歪虎
帝王 ？ 撒少申？ 祥符

方尼米文昆矣△△
萬世 詔〔セシ〕 土滿札 班？？？

XXXII

五狀炎哭号〔志茶△〕
午載 孝〔治〕 罕阿捏 塞吉革 扎撒

作号美丑作炎犯丑臭(東)
吉普重ト失吉塞革思監(都督)

XXXIII

冬米东申足
大 定 安班 南哈孩

文 刘 狀
二十五 年 倭林 順扎 阿捏

卅 月 文 兆 日 孛 赤(1)
七 月 二十八 日 立(設)ツ。 細丹少阿 倭林 扎固 熊吉 一立 受

南尼△△
一那 是(維)

寺史斧臭
阿赤ト魯 厄 黑 堅 明

備考

〔題額及びI〕

（1）安春溫　女眞語『金』を謂ふ。トルコ語で金を altun（古代トルコ語も同樣であることは突厥碑文に頻見する所よりしても窺はれる）蒙古語で altan（例へば韃靼館譯語珎寶門に altan 安壇とある如し）と謂へば、安春溫（或は安出・按春）は恐らくこの altun, altan の訛つた alčun を寫したものであらう。然るに、金史（卷二四）地理志（上）の序に、

國言金曰按出虎。以按出虎水源於此。故名金源。建國之號蓋取諸此

とて女眞語では金を又按出虎とも謂ひ、金朝の國號は實に按出虎水に由來すと謂ふ。

按出虎水は一に、阿注滸（完顏婁室神道碑）阿觸胡・阿朮火（三朝北盟會編）阿之古（高麗史）阿勒楚喀（吉林外記）とか、又金史には阿朮滸（卷二四）按出滸（卷四、卷二三）安朮虎（卷八四）案出滸（卷八一）等とも書かれてゐるが、何れも alčun + ko（或は ka, ga, go）を寫したものと見るべく、虎・滸・胡・火・古・喀等は diminitive suffix の ko, ka（ga, go）に當る。從つて「按出虎」は嚴密には、『金色を帶びたる』、『金色がゝつた』の意であらう。

張滙の金虜節要によれば

以本土愛新（原作阿祿阻？）○改譯にして爲國號。愛新女眞語金也。以其水生金而名之。猶遼以遼水名國也（建炎以來繫年要錄卷一所引）

とて、按出虎水に金を産したが故に、かく名付けたと謂ふ。

因みに、この河は、現在は阿什河と呼ばれてゐるが、これは恐らく滿洲語で金を意味する aisin の音譯であらう。

(2) 你　Genitivus(二格)を示す助詞にして前に來る名詞の語尾が n で終る時に用ゐられ、その他で終る時は「以」となる。

(3) 忽土皚葛蠻　金史(卷二四)地理志上京路會寧府の條に、

有得勝陀。國言忽土皚葛蠻。太祖誓師之地也。

とある。從來之に就いては異說多く、乾隆の欽定金史語解(卷三)には滿洲語、額勒赫 (elhe＝安き) 格們 (gemun＝京)の義と說き、吉林外記(卷九)は滿洲語、額特赫 (etehe＝勝ちたる) 噶珊(gašan＝村)吉林通志(卷二〇)は額特赫格們、東三省輿地圖說には額特勝噶珊と謂ふ。我が松井等氏は、「忽土皚」は滿洲語 etembi (勝つ) の過去形 etehe、「葛蠻」は giyamun (驛站) に當る語であると述べてゐる。(滿洲歷史地理、第二、一七二頁) 然るに今、女眞字をみるに、忽土に當る文字は『勝つ』を示す女眞字「厄忠昧」とは全く異なれば、その意味は他に求めなければならない。女眞語で『福』を「忽禿兒」(グルーベ 343)「忽禿力」(阿波本 靜嘉堂本)滿洲語で huturi と謂ふ。終りの r 或は ri は suffix とみるべく (出村良一氏、滿洲語及び通古斯語に於ける動詞轉化の接尾語に就いて。東洋學報一八卷三號四〇八頁參照)又、Klaproth も Glück を女眞語 Chudu, 滿洲語 Chuturi と謂へば(Asia Polyglotta p. 293)その語根は「忽禿」にして、金史(卷一三五)國語解にも與人同受福曰忽都と謂ふ。これはトルコ語 qut＝das Glück (Radloff, Versuch eines Wörterbuches der Türk-Dialecte Ⅱ. P. 990)

に淵源を求め得られないであらうか。このqutはOrkhon碑文やŠine-usu碑文或はUijur語諸文献等にも屢々みえる。從つて「忽土皚」は寧ろこれに緣故を有するものとみるべく、qut＋kai『福ある』、『福を得たる』の義にしてkaiのiは出村良一氏も既に指摘された如く（前掲論文四〇〇頁註2）滿洲語の古形としての女眞語に保存されてゐるものである。次に「葛蠻」（kaman or khama は得勝陀の陀に『險惡なる通路、崖際』等の意がある所より推して滿洲語 kamni（隘口、關口）と同義なる女眞語ではあるまいか。以上によつて、「忽土皚葛蠻」は『福を得たるの關隘』或は『吉祥ある關口』の意とみるべく之を碑面漢文の第十二行「太祖曰。此殆吉祥。天地協應。吾軍勝敵之驗也。（中略）若大事克成。復會於此。當酹而名之。後以是名賜其地云」とあるに照合する時は、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがあらう。然らば得勝陀とは女眞語「忽土皚葛蠻」の支那風の意譯であらう。

因みに、本碑文を通じて吾等の推測し得た所によれば、單にこの語のみに止らず、女眞語――從つて滿洲語に對しても同樣に謂ひえようが――の中にはトルコ語・蒙古語に系統を引くものが可成り多くあることは注目すべきである。

（4）幹溫　女眞語では石を、「幹黑」と謂ひ、滿洲語では wehe である。之より推して「幹溫」は碑面漢文の頌碑に當るものと考へたい。

猶、以下に引用する W. Grube, Die Sprache und Schrift der Jučen, (Leipzig 1896) は便宜上單にグルーベ、又東洋文庫・靜嘉堂文庫、德島市阿波國文庫所藏の女眞譯語は夫々、東洋文庫本・靜嘉堂本・阿波本と略稱することゝしたい。こゝに謂ふ靜嘉堂文庫本とは石田幹之助氏の發表に係る「女眞語研究

の新資料（桑原博士還曆記念東洋史論叢所收）中の女眞語彙を指し、阿波國文庫本とは同僚外山學士が同文庫本によつて手鈔されたものゝことである。

〔Ⅰ〕〔Ⅱ〕〔Ⅲ〕

この三行は夫々撰文・書丹・篆額をものした人々の官銜を記したものと思はれるが、何れも明晰を缺いでゐることは遺憾である。第〔Ⅱ〕「寒里因」は或は『翰林』の音譯かとも思はれるが、第〔XXI〕行にみえる「監林」（註4）とは字形異るが故に疑に止める。

〔Ⅵ〕

（1）鈔師　軍又は武は「鈔哈」にして（グルーベ 278, 296）滿洲語 cooha に當るが、元來その語幹は鈔・coo にあるものゝ如く――或は突厥碑文に屢々見える ·ü『軍隊』は之と同系統ではあるまいか――思はれるが故に、こゝでは一應『軍師』と譯して置く。

（2）伯　助詞にして、滿洲語 be と同じく『ヲ』を示す。

（3）兀忽黑　「黑」は動詞過去形語尾にして、その現在不定法は「兀忽埋」である。

〔Ⅶ〕

（1）東卒米　「米」は滿洲語の fi と同じく Past Gerund を示す接尾語であらう。東は華夷譯語中には見當らないが、女眞語に『領する』を東尖（荅魯埋）と謂へば、或は碑文の東と譯語の東とは同一文字ではあるまいか。滿洲語 dalambi には『爲首』の意がある。

（2）必刺　この字はグルーベ（40）には「必阿」とて月と同じ發音の如くあるも阿波本・靜嘉堂本の「必

刺」を正しとする。滿洲語 bira に同じ。從つて表記三字は來流河の音譯であらう。

（3）朶　助詞にして、滿洲語 de に同じく『ニ』である。但しこゝでは、『ヲ』の意に解する方がより國語的のやうに思はれる。

（4）塔別　「別」は Past Gerund にして語幹「塔」は滿洲語 dabumbi 蒙古語 dabamoi（兩語共に、過グ・越エル・踰過スルの意）か、或は滿洲語 doombi（渡ル）の何れかと同義語であらう。

（5）革恩　「革恩阿揑」が『多年』なれば、「革恩」は『多イ、衆イ』の意を有する形容詞にして、滿洲語 geren に當る語である。

（6）　この字は『ニ』或は『ヲ』を示す助詞であらう。第〈XI〉行〈XIII〉行〈XVIII〉行〈XXI〉行等と比較參照する要がある。

（7）果卜兀魯　華夷譯語に「戈迷吉果卜連」＝寬饒とある。（グルーベ 735）「戈迷吉」は『長キ』『寬ナル』の意にして「吉」は形容詞語尾である。「卜連」は使役を示す動詞接尾語なれば、全體の意は『寬饒ナラシメル』である。從つて、「果」には『饒』の意があるものと考へうる。「卜兀魯」は滿洲語 burtai（都テ、全テ）より推して之と同義に解し、「果卜兀魯」を『畢ク』と譯した。

〔VII〕

（1）この二字は發音不明であるが、恐らく『首メ』或は『首先ニ』の意を有するもので、滿洲語 neden nenemeなどに相當せしむべきであらうか。

（2）朶　滿洲語 de に同じく『ニ』を示す助詞である。

（3）木魯　過去を示す動詞尾である。

（4）斡兀迷兒（？）　この三字は碑面漢文と對比する時は、正しく『國相』に相當すべき語の如く思はれるも、在手の拓本は字劃鮮明を缺ぐが故に暫く疑に止む。

（5）塔哈埋　埋は動詞不定法語尾なれば『順フ』と譯すべきであるが、次に「的昧」（來ル）を伴ふが故に『順ヒ來ル』と解した。かゝる例は、女眞館來文に於ても屢々見る所で、例へば、『謹ンデ奏ス』を「者只昧召刺埋」と謂ふが如し。

〔Ⅸ〕

（1）第〔XXⅢ〕行と比較參照すべし。

（2）孩　この語は動詞過去を示す接尾語である。

（3）哈哈　この語は或はトルコ語・蒙古語 kökö（蒼イ）に當るものではあるまいか。碑面漢文の赭白馬（或は紅白馬）は滿洲語では burulu と謂ふ。

（4）この語は三字の中二字共發音不明であるが、Klaproth によれば Hoch を女眞語では Cheshilie とも謂ふと（Asia Polyglotta p. 293）

因みに、本行は第〔XXⅢ〕行六・七・八段と對照すれば幾分相發明する所があるであらう。

〔Ⅹ〕

（1）卜魯　華夷譯語女眞館來文をみるに（グルーベ XV P. 134）「古帶〔太 卜魯 安班 麻希刺〕子〔玉・帶 并 大 帽〕子」とあり。從つて「卜魯」は『并ニ』の意であらう。

〔XI〕

(1) ?住希　第〔XXV〕行七段との比較によつて『敵』と譯した。滿洲語では『敵』を bata 或は bagčin と謂ふ。

(2) 前揭第〔VII〕行　註(6)參照

(3) 阿刺魯　「魯」は動詞不定法語尾なれば『敗ル』の意である。

(4) 瑣塞魯　この語は滿洲語 sosambi（人口ヲ擄掠スル）と同義語であらう。

(5) 一兒厄　華夷譯語には「一兒厄伯」を『百姓』（但し「伯」は助詞『ヲ』を示す）とある。(グルーベ 813) これは恐らく蒙古語・滿洲語の irgen に當り、突厥碑文の ir (är) = homme とも語源を同じくするものであらう。

(6) 忽孫　『力』(グルーベ 513阿波本、靜嘉堂本は「忽速」)なれば、この一節は碑面漢文と照應して『同心シ協力スベシ』と譯し度い。トルコ語では『力』を küč 蒙古語では kučün と謂へば「忽孫」は之等と同語源であらう。猶「△失別」は金史國語解に「以力助人曰阿息保」と謂へば、或は兩者は似たものかも知れない。

(7) 吉撒　この語はグルーベ(859)に『呵』とあるより推して『若シ……ナレバ』の意に解した。

〔XII〕

(1) 多羅斡　これはトルコ語 töri 蒙古語 tü ü 滿洲語 doro と同義語である。

(2) 兀稱因厄禿別　「兀稱因」は『甲』にして(グルーベ 233) 滿洲語 ugsin に當る。「厄禿別」の「厄禿」はグルーベ(846)によるに『穿ツ』の語根なれば、從つて「兀稱因厄禿別」は『甲

ヲ穿チテ』或は『甲ヲ穿チテ後』の意となる。「別」は既述の如く Gerund を示す語尾である。

（3）那ト連昧　これは恐らく滿洲語 namarambi に對應するものであらう。之に相當する蒙古語は ci-marhamoi にして（三合便覽）カヴァレウスキーによれば、『辛抱强クアル』『頑張ル』の意もある。（蒙露佛辭典 P. 2168）

（4）嫩木杜兒　華夷譯語によれば、『青』を「嫩江」と謂ふ。（グルーベ 616）「江」は名詞或は形容詞の接尾語――主として色に關する？――である。滿洲語で『青』を niowangiyan と謂へば、女眞語「嫩江」は之に相當するものにして、niowangiyan は同時に干支の『甲』をも示すものなれば、女眞語に於ても、しかく解して誤らないであらう。

「木杜兒」はグルーベには『龍』とあれば（135）正しく干支の『辰』にして、滿洲語でも『辰』を muduri と謂ふ。

〔XII〕

（1）吉牙魯昧　滿洲語 giyarimbi『巡狩スル』『巡察スル』と同義語であらう。

〔XIII〕

（1）この字には、厄・幹・兀・黑勒・忽・都等の音がある。

（2）莽葛　この語は『難』の意にして（グルーベ 702）滿洲語 mainga に同じ。

（3）第〔VI〕行　註（6）參照

（4）卓？別　この語は滿洲語 jobombi『慮ル』に對比せしめ得られないであらうか。

〔XV〕

（1）？者魯　　これは恐らく滿洲語 eyerjembi『鮮明ニスル。昭ニスル』と同義語ではあるまいか。「魯」は動詞不定法を示す語尾なれば、「？者魯非稱者」は碑面漢文の『光昭』に應ずるものであらう。

（2）兀魯塞別　　滿洲語 urhusembi『傾ク。垂レル』より推して『傾ケル。盡クス』の意に解したい。「別」は Gerund である。

（3）一車吉　　華夷譯語に『新』を「一車吉」と謂ふ。（グルーベ 666）「吉」は形容詞の語尾であるが、こゝでは副詞的に譯した。滿洲語では ičе である。

〔XVI〕

（1）？兒　　これは滿洲語 enduri『神』に相當する語であらう。

（2）滿洲語では『穆』を čibsoŋgo と謂ふも、これは廟位を示す昭穆の穆（第二位の意。從つて蒙古語では gün edeget『右側』と謂ふ）である。然しこの語の母語とも思はれる čib 或は čibsen, čibsembi 等には何れも『靜』『靜悄』の意が含まれてゐる。

〔XVII〕

（1）第〔VII〕行　註（6）參照

（2）？班　　碑面漢文と照應するに恐らくこれは『忘レル』の意を有する語であらう。滿洲語では oŋgombi『忘レル』である。

（3）？阿揑　　第一字目は不明であるが、碑面漢文に照して『明年』に當るものと考定す。

〔XVIII〕

（1）背塞　華夷譯語によれば『官』『官人』を「背勒」といふ。（277, 763 グルーベ）これは滿洲語「貝勒」に外ならないであらう。この「貝勒」の複數形と思はれるものに「貝子」（beise）がある。（今西春秋氏譯稿「滿洲實錄」八頁註參照）この「貝勒」より「貝子」への轉化關係は今日猶不明であるが、憶測によれば、「貝子」beise は「貝勒」beile + se（複數尾）の l が assimilate したものではあるまいか。從つて女眞語「背塞」もしかく解されないであらうか。因みに beile の語源は今日の所不明に屬するが、Pelliot 氏や Müller の謂ふ如くトルコ乃至西方起源に求むべきではあるまいか。

（2）こゝでは「塞」の一字しか判讀しえないが、碑面漢文と對比して、滿洲語 hebešembi『商議スル』の如きに相當すべき語と推測する。

（3）塔安　「安」は字劃不明にして「恩」の如くにも思はれるが何れにしても『唐』の音を寫したものであらう。

（4）この三字は恐らく『玄宗』の音譯であらう。

（5）革揑別　「革揑」は『去ル』『往ク』の語根なればこの語を『幸シテ』の意に譯す。

（6）この五字は最後の「孩」が動詞過去形を示す語尾であることより推して、『起義』の直譯卽ち『義ヲ起シタ』の如き意を示すものと考へたい。

（7）塔安　この二字は明かに『堂』の音譯である。

〔XX〕

（1）吉撒　第〔XI〕行　註（7）參照

〈XXI〉

(1) 第二字目「凫」は字劃不明であるが、恐らくこれは前行に續くものにして『勅シタリ』とか『勅セリ』とかの如き意を有するものではあるまいか。

(2) 可　撰者趙可の可を音寫したものである。

(3) 恩忠黑　華夷譯語には『罰』とあるも(グルーベ404)こゝでは『罪』と譯したい。滿洲語 endebuku『咎・過』、蒙古語 endegurel 等と同語源ではあるまいか。

(4) 監林　翰林の音譯であらう。

(5) 赤巴勒　滿洲語 ečihe『雖然・然則』或は eči『若是・則』等より推してこの語を『然レバ則チ』の意に譯することゝした。

(6) 扎撒富　「扎撒」は「扎撒埋」=治メルの語根にして「富」は不明であるが、暫く不規則動詞命令法を示すものと疑つて後考を俟つ。

(7) 塞魯　滿洲語 sere『說是・說』より推測して『……ナリト』の意に解したい。

(8) 忠魯忠　グルーベ(482)に『進貢スル』を「忠忠卜麻」とあるより推して『進メル』の意に解した。

〈XXII〉

(1) 希彈　この二字は契丹を寫したもので、契丹は正しくは突厥碑文にも頻出する如く Kytai と音ずべきであるが、ここに「希彈」と寫されてゐるのは惟ふに漢字よりの音譯であらう。因みに、白鳥博士によれば突厥碑文には Kytai の外に Kytan とも呼ばれたとあるが(東胡民族考及び岩波東洋思潮塞外民族の項參照)恐らくこ

れは何等かの誤解に基くものゝやうである。

(2) 幹失昧　この語は終りの「昧」が不定法語尾であるが故に『陞ル』の意であるが、本文では次の語との關聯上『陞リ』と譯した。猶かゝる用法については第〔VII〕行註(4)參照。

(3) 第〔XVII〕行參照。

(4) 兀者必登　終綴の「登」は恐らく副詞尾にして、この語の動詞不定法は「兀者必昧」である。

(5) 受　この字は過去動詞語尾の如く考へられる。

(6) 哈荅？？　グルーベに「哈荅溫」＝誠(409)「哈荅孩」＝信(377)とあり、而して前者の語尾「溫」は形容詞を示す接尾語、又後者の語尾「孩」は動詞の過去を示すものなれば、之等の語幹「哈荅」は『誠・信』の義を有することを知る。又次行第〔XXI〕四段目と比較して字劃不明瞭なる二字を「岁夾」ならんと疑ひ、この三字を『信ニ・實ニ』の意に解したい。

〔XXI〕

(1) この一段は不明であるが碑面漢文の『各稱爾戈』に當るものであらう。猶第〔XXII〕行五段と比較すべし。

(2) 第〔XXI〕行註(6)參照。

(3) 阿玷班　華夷譯語では『雷』を「阿玷」と謂ふ。(グルーベ 7) これは滿洲語 agjan に相當する。

〔XXIII〕

(1) 第〔VIII〕行註(1)參照。

(2) 撒必　この語は滿洲語 sabi『祥・瑞・兆』に當つべきである。

（3）（4）第〔Ⅸ〕行參照。

〈XXV〉

（1）罕安　　これはトルコ語・蒙古語 qa'an「可汗」に同じ。阿波本には「哈安」とある。

（2）失　　阿波本に「亦立失。亦立」＝『起來スル時ニ起來セヨ』とあるより類推して「禿魯哈兒失。」を『視タルニ』『視タル時』と譯して置く。

（3）塞麻　　この語は不明であるが、或は滿洲語 seme の如き意を有するものではあるまいか。

（4）この一句は碑面漢文に依つて窺へば『美徵』の意を有するもの〻やうである。

（5）（7）第〔Ⅺ〕行註（1）參照。

（6）撒必申△　　第〈XXⅦ〉行二段・七段或は第〈XXXI〉行最終段等よりして、『祥符』と譯す。

（8）『神』は既に說明した如く（第〈XⅥ〉行註（1））「克孚」にしてこの文字とは第二字目が異るも碑面漢文と對照して暫く『神』と譯して置く。

〈XXVI〉

（1）この一段は全く不明である。

（2）第〔Ⅻ〕行參照。

（3）この一段も譯解しえないが、第〈XXⅢ〉行三段目と對比して之を碑面漢文『戈甲相屬』の意を有するものと考へる。

（4）洪　　動詞の過去を示す接尾語である。

（5）第〔XV〕行註（1）參照。

（6）哥塞　華夷譯語には「厄木你哥塞」を『一般』と漢譯してゐるが(758 グルーベ)直譯すれば『一ノ如シ』にして「哥塞」は滿洲語 gese『……ノ如シ』に當る。阿波本には「佛以革塞」を『照舊』即ち『舊ノ如シ』と謂ふ。

〔XXVII〕

（1）ト？　この語は本行第三段「王你ト？」等と對比して『房・家』の意を有するものと考へる。

（2）撒？　グルーベには「撒希」＝知とあるも(353)その不定法は阿波本・靜嘉堂本に「撒必」とあるを正しとすべく、從つてその語幹は「撒」にして「希」は恐らく Subjunctive Present を示す動詞接尾語と見做すべきであらう。滿洲語でも「知ル」は sambi である。

（3）二字とも字劃全く不明であるが、碑面よりして、『流ル』と譯した。阿波本によれば『流ル』を「額因必」と謂ひ、靜嘉堂本も同樣である。滿洲語 eyembi に當るものである。

（4）寒素　これは恐らく漢祖の音譯にして、漢高祖の意であらう。

（5）劍は「罕麻」(217 グルーベ)又は「斜烈」(金史國語解)であるが、こゝではその語が磨滅して讀み取り難い。

（6）この一段は恐らく碑面漢文の『治彼宗元』に相當するものであらう。

〔XXVIII〕

（1）この三字は『遺老』の『遺』に相當すべき語と思はれるが、字劃不明にして、或は强ひて讀めば「弗厄以」（舊ノ）の如くにも解せられる。

（2）阿卜哈以追　華夷譯語に『孩子＝子供』を「追一」と謂ふ。（グルーベ 294）これより推して「阿卜哈以追」は『天ノ子』卽ち『天子』であらう。

〈XXIX〉

（1）この一段は碑面漢文『化被朔南』に對應すべきものであらう。

（2）この段は碑面漢文『六飛戾止』を譯したものであらう。

〈XXXI〉

（1）??魯　上の二字の發音は之を窺知しえないが、その意は恐らく『詔』であらう。滿洲語 selgiyambi には『傳諭スル・布告スル』の義があり、詔を selgiyere hese と謂へば、或は之等と同系統のものではあるまいか。

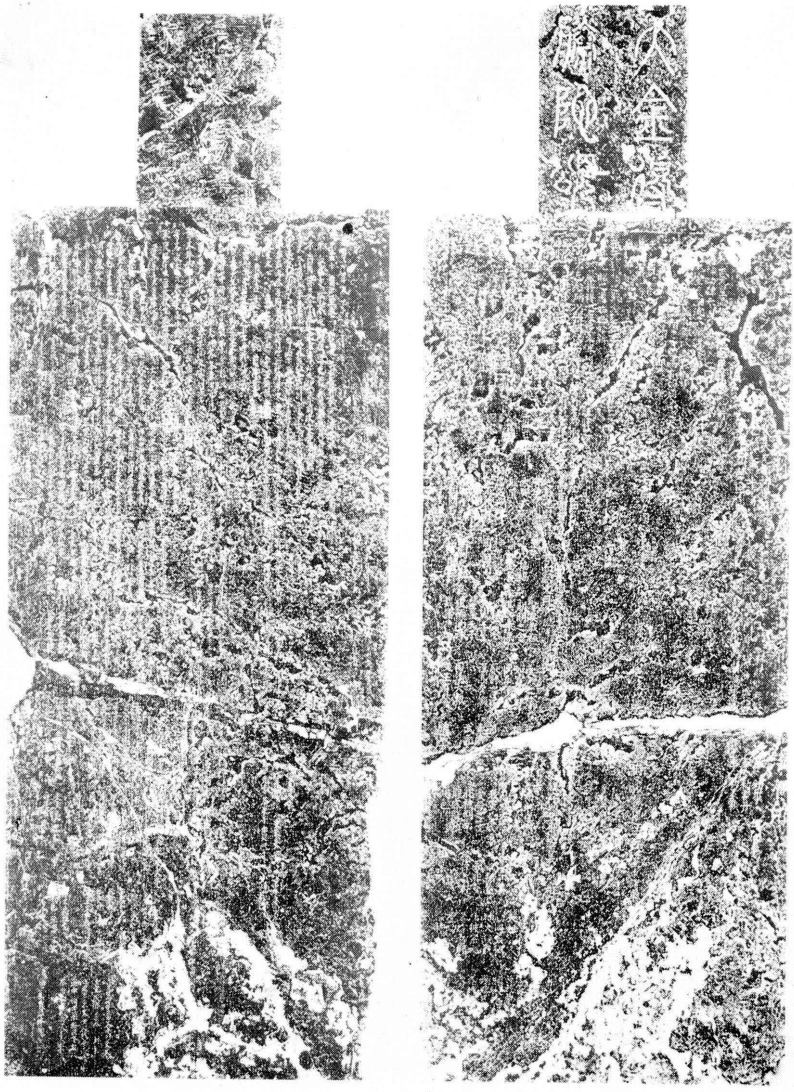
（2）兀恩王　この三字は『文王』の音寫である。

（3）（4）「非稱」は『光』なれば（グルーベ 625）これより推してこの六字は碑面漢文『潤色祖業』の潤色を意味するものと考へ度い。

〈XXXII〉

（1）受　第〈XXII〉行註（5）參照。

終りに、本備考に於ては印刷の都合上女眞文字を以て說明し得ず、專ら對譯漢字を以て表はした爲、讀者の理解を困難ならしめた點多々あつたことゝ思ふが、これに就いては特に諒恕を請ふ次第である。



第一版圖　大金得勝陀頌碑拓（文漢面碑は右・文眞女陰碑は左）